

角川新書『戦艦武蔵の最期』お詫びと訂正

二〇二三年十一月刊『戦艦武蔵の最期』（初刷）六・七頁において編集上の不備があり、一部原稿が欠落してしまっておりまして誠に申し訳ありません。心よりお詫び申し上げます。

【誤】

おれたち両舷直作戦中で、本隊より一日入港の遅れていた重巡最上を旗艦とす
る満潮、朝雲、山雲の第四駆逐隊も二時間前に到着したので、これで第二艦隊
は全部集結したわけである。

【正】

おれたち両舷直は、さっそく総がかりで、艦首から艦尾まで、両舷をくまなく
塗りあげた。おかげで武蔵は、濃いネズミ色のてらてらした光沢をおび、とこ
ろどころ赤錆のうき出ていた乾舷（水線から上の舷側）も見ちがえるほど綺麗にな
った。まるで進水直後のように……。

これを見て、あとで下士官たちが、「これじゃかえって敵さんの目について狙
われやすいぞ」とぶつぶつこぼしていたが、これもおそらく、どうせ出撃まえ
可燃物として処分することになっているペンキだから、そんならいつそ塗って
しまったほうが片付いていいぐらいに、副長か甲板士官あたりが気をまわして
思いついたことかも知れない。

それがすむとおれたちは、こんどは艦内の可燃物の処理をはじめた。艦内には、
ペンキのほかにも燃えやすいものはかなりある。短艇庫の内火艇やカッター、
それに各部の甲板天幕、食卓、乗員の衣囊、寝台、釣り床などが、釣り
床は戦闘配置の防弾用に若干のこして、あとは全部、分隊ごとに水線下に格納
し、ランチとカッターのほうも、救助艇として、それぞれ二隻あて残しただけ
で、あとはすべて島の基地におろしてしまった。ついでにこれも火災になった
場合を考慮して、上甲板の通路のリノリウムも、のこらずひっぺがした。リノ
リウムは、さくら色の接着剤で床の鉄板にたくくっついているので、それを
一枚一枚はがしていくのはずいぶん骨が折れた。結局これだけでも、日没頃か
らはじめて巡検まぎわまでかかってしまった。

それから、今朝になってから戦闘配置の兵器整備だ。もつともこのほうは、すでにリング泊地で十分整備してあったので、別にあわてることもなかったが、それでもいざ出撃となると、念には念を入れなくてはならなかった。

そこでおれたちは、朝食後から配置につきっきりで、いつもよりずっといいいに銃身の分解掃除をしたり、膛中（砲身の中）を洗滌したり、撃針や発条も新しいのと取りかえたり、機動部には、グリスや油をさしたりして、配置の総点検をおこなった。むろん、戦闘になってからまごつかないように予備弾倉も規定通り用意し、まわりの防弾用の砂囊も、あらたにしつかりと積みかえた。そしてそれがいまようやく終わったところだ。

おれは、みんながデツキ（居住区）へ引き揚げてから、念のためにもう一度銃を試動してみて、引き金や開閉桿の調子などをたしかめてから、銃架をもとの位置に固定した。俯仰も旋回も照準器の具合も上々だ。弾室と弾倉の噛み合わせもうまくいっている。もうこれでいい。射撃は順調にやれるだろう。とにかくこれで戦闘準備はすんだ。あとはただあすの出撃を待つばかりだ。

まもなく「課業やめ」のラッパが鳴った。正午だ。太陽はむきみのまま、うるんだように中天にころがっている。暑い。おれは顔の汗をぬぐいながら、手摺りのところまで歩いていって、ひとわたり湾内を眺めてみた。湾内には、二日前から集結してきた各艦が、思い思いの方向に艦首をむけて投錨していた。

第二艦隊旗艦の重巡愛宕をとりまくようにして、湾の右手には、戦艦の長門、金剛、榛名が檣楼をつらねて並んでいる。榛名はいま右舷に油槽船を横づけて、重油搭載の最中だ。白いいんかん服（掃除服）を着た機関兵たちが、甲板を忙しうにとび廻っている。そこから左へ少し離れた岬の手前には、重巡の摩耶、高雄、利根、筑摩、戦艦の山城、扶桑の姿も見える。せまい湾口からはみ出たように、艦首を沖にむけて並んでいるのは、能代を旗艦とする第二水雷戦隊と第十戦隊の駆逐艦だ。ラバウル水域に作戦中で、本隊より一日入港の遅れていた重巡最上を旗艦とする満潮、朝雲、山雲の第四駆逐隊も二時間前に到着したので、これで第二艦隊は全部集結したわけである。